跋　文

本年度埋蔵文化財調査室の発掘は4月当初から3月下旬まで行われ，調査遺跡は14カ所，その調査面積は約4,800m²にも及んだ．本庄地区の医学部付属病院の新営工事に伴う発掘から始まり，引き続いて工学部実験棟や工学部衝撃・極限環境研究センターの建設に伴う調査とほぼ年間を通して大規模調査が行われ，その中間にも各種の立ち会い調査が組み込まれるなど，熊本大学埋蔵文化財調査室は多忙を極めた年であった．調査が年度末まで及んだために小畑・大坪両氏は発掘を行いながら，一方では『調査室年報』の作成にもあたらなければならず，土日祭日を返上して整理・報告書作成作業に従事しなければならなかったことは，極めて遺憾である．このために植物種子や動物遺存体などの自然科学分析の結果がこの年報に十分に反映させることができなかったことは誠に残念であった．

本庄地区の調査では古墳時代初期の集落址が検出され，白川左岸の自然堤防上には弥生時代以降連綿として古代人の住居地が形成されていたことが判明し，また黒髪地区では少なくとも縄文時代後期から大規模な集落址が営まれていたことが発掘の結果から窺われ，熊本大学構内遺跡だけでも，考古資料から熊本の歴史を語ることができることが明らかにされたことは極めて重要である．さらに今年に入っての工学部衝撃・極限環境研究センター建設地での調査では，江戸時代の「畑の畝址」が検出されたが，通常の畑の畝幅よりも小さく，何の作物が栽培されていたのか種子分析を急いでいる最中で，結果が待ち望まれる．昨年度発掘した自然科学研究科・理学部新営工事に伴う調査では，古代コムギとして最近注目されている「小型」コムギが検出されており，栽培植物の変遷を知る上で貴重な資料となっている．

今日の発掘調査では考古学的な遺構を発掘するだけではなく，自然科学を中心とした分野の研究者の協力を得て，総合的な調査が一般化しつつあり，多くの研究スタッフを取り揃えている大学こそがその先陣をきらなければならないことは言うまでもない．今後学内の調査においても全学的な研究の取り組みが求められる所以である．

2000年3月25日

熊本大学埋蔵文化財調査室室長

文学部教授　甲元眞之